

女子大学生の大学適応に関する研究（1）

——大学への動機づけ，人格特性と適応との関連——

安藤 明人

(武庫川女子大学文学部人間関係学科)

Adaptation to college life in female students (1):
An examination on the relationship between motivation to
college education, personality characteristics and adaptation

Akihito Ando

Departemnt of Human Relations

Mukogawa Women's University, Nishinomiya 663

The present study was conducted to examine the relationships between motivations and attitudes to college education, personality characteristics and adaptation to college life in female college students. 551 subjects were requested to complete the questionnaire on 25 scales on personality / attitude traits and motivations and attitudes to college education. Based on the current attitude to their own college, highly adaptive students (N=29) and maladaptive students (N=27) were extracted, and comparisons of both groups of students were made on motivation variables and personality / attitude variables. The main findings were as follows: (1) Three factors such as the degree of favorable acceptance of the school uniform, the rank of preference of the enrolled college, and grade were strongly associated with the degree of adaptation to college life. (2) Highly adaptive students were likely to take the other-directed strategy in their interpersonal relationships or social life, and on the contrary, maladaptive students were likely to take inner-directed strategy.

はじめに

現在の日本の大学は、かつての少数のエリートを対象としていた大学とはその性格や内容を大きく異にしている。この大学の変貌は「大学の大衆化」という言葉に要約することができる。

大学の大学の大衆化は、まず第1に高等教育への門戸を大衆に解放し、大学への進学機会の民主化を促した。これによって大学は、一部の特権的なエリートの教育のためだけのものではなく、広く国民大衆の教育機関としての役割を担うようになった。このような変化は、大学進学率の上昇となって現われ、近年頭うちの傾向にあるというものの、それは30%を越えている。この結果として大学そのものが、トロウ (Trow, M.) の分類によると、従来の「エリート型」から「マス型」に移行した。このため、大学進学者が少数者でありエリートであった時代に確立された高等教育制度の改革、カリキュラムの見直しが求められる時代になってきているのである。

この大学の大学の大衆化は、第1段階としては、制度の手直しといったいわばハードの面での高等教育の見直しを迫った。しかし現状をみてみると、それだけで大学の大学の大衆化に対応できないことは明白であり、むしろ、大学

教育に参画するもの(教師と学生)の意識上のソフト面での変革が第2の段階として求められている、という認識が必要になってきているといえる。

というのは、大学の大衆化による大学進学者の増加が、総体としての国民の平均的教育水準の底上げには貢献したかもしれないが、それが大学教育の内容や水準のレベルアップには必ずしもつながらず、むしろ逆に、「猫も杓子も」大学に進むようになったために、大学教育の質の低下が懸念されるようになってきているからである。現在の大学教育においては、従来の「エリート型」の大学において重視されたアカデミックな教育・研究が果たす役割はしだいに薄れ、「4年間の社会的に公認された休暇」のつもりで、さしたる目的ももたずに入学してくる学生に、いかなるサービスをアカデミックなオブラートに包んで提供するかが大きな問題となってきたのである。

ここで問題となるのが、教師と学生の間が存在する、「大学教育」というものに対する意識のギャップである。教師世代の多くは「エリート型」の大学教育を経験してきており、それを大学教育の理想としているものが多い。一方、学生はまさに「マス型」の大学しかイメージできないのが現状である。ここに、共通の大学であるいは教室であいまえながら、意志の疎通、コミュニケーション、相互理解などが思うにまかせないという不満を、教師の側にも学生の側にも抱かせる原因があるかもしれない。

大学への進学目的を取り上げてみても、かつてのような「学問の深奥を極める」といった高邁な目的は後ろへ退き、「技術・資格の取得」「就職に有利」といった実利的な目的が前面に現われるようになってきている。さらには「みんなが大学に行くから」とか「すぐに就職したくないから」「なんとなく」といった目的といえないような無目的・モラトリアム型の進学動機をあげる学生も増え、大学への進学動機そのものが多様化してきているのが現状である。

このような大学教育をめぐる環境の変化の中で、学生に対する大学の対応も、旧来の「エリート型」の大学における対応からの脱皮を迫られているといえよう。そのためには、現在の大学生が大学に対して何を求め、何を求めているかという学生のニーズをまず正確に把握し、次にそのニーズに対して大学側はどこまで応えるかを考える必要がある。これを模索する際、教員・大学側が「エリート型」の大学におけるパラダイムにいつまでも固執していると、現代の大学生のニーズがまったく了解不能であるか、あるいはその重要性を見過ごす危険性がある。

そこで本研究では、学生消費者主義(student consumerism)の時代の到来を視野において、①大学における「教育」というサービスの消費者である学生のニーズの態様を、大学への適応という視点を切り口にして明らかにし、②それに基づいてとくに教員・大学側に、学生に対する認識の転換のための資料を提供すること、を目的とする。

方 法

被験者および調査の実施

私立女子大学(以下、大学と略す)および同短期大学部(以下、短大と略す)の学生551名を調査対象とした。被験者の大学・短大、学年別内訳は、大学194名(1年52名、2年50名、3年48名、4年44名)、短大357名(1年212名、2年145名)である。

被験者の出身高校は、公立高校が全体の60.5%で最も多く、ついで系列高校が33.0%、私立高校その他が6.5%となっている。大学生と短大生の間出身高校の構成には差はない($\chi^2=3.44$, N.S.)。

居住形態は、自宅通学生が83.9%で多数を占め、ついで下宿生の10.7%、寮生その他の5.4%となっている。これについても大学・短大間に構成の差はない($\chi^2=1.80$, N.S.)。

出生順位では、長子が44.9%、末子36.2%、中間子11.3%、ひとりっこ7.6%となっており、これについても大学・短大の間に構成の差はみられない($\chi^2=4.06$, N.S.)。

調査は、「女子大学生の生活意識調査」の名目で、1989年4月から5月にかけて、無記名方式で実施した。

調査票の構成

調査票は、被験者の人格特性に関する部分と、フェイスシートおよび大学進学等に関する意識調査項目から構成されている。前者の人格特性に関する尺度の内容は結果の所(Table 3)にまとめられている。

後者は、出身高校、現在の居住形態、きょうだい関係、大学への進学動機、当該大学(学科)への入学動機、現在の気持ち(入学してよかったか、後悔しているか)、当該大学(学科)の志望順位、大学選択に際して共学大学か女子大学かは重要な要因であったか、同じく、制服の有無は重要な要因であったか、制服を着て町を歩いているときに他人の目をどの程度意識するか、制服に対する意識・態度、当該大学の学生であることに對する誇りの有無、の以上12項目から構成されている。

結果と考察

大学に対する適応状況

各被験者の大学に対する適応状況を測定することを目的として、本学(学科)に入学して良かったか、それとも後悔しているかについての現在の気持ちと、自分の大学に対してどの程度誇りをもっているかについて聞いた。その結果が Table 1 にまとめてある。

Table 1 Cross tabulation between the degree of student's satisfaction after entering the college and the degree of attachment to their own college.

満足度	大学に対する誇り				合 計
	強く もっている	どちらかと いうと もっている	どちらかと いうと もっていない	まったく もっていない	
よかった	29 (5.3)	78 (14.4)	15 (2.8)	3 (0.6)	125 (23.1)
まあよかった	5 (0.9)	176 (32.4)	115 (21.2)	10 (1.8)	306 (56.3)
後悔している	2 (0.4)	25 (4.6)	58 (10.6)	27 (5.0)	112 (20.7)
合 計	36 (6.6)	279 (51.4)	188 (34.6)	40 (7.4)	543 (100.0)

「入学して良かったかどうか」については、全体の8割弱が「よかった」「まあまあよかった」と答え、自分の大学選択の結果について肯定的評価を与えている。それに対して、学生の約2割が「後悔している」と答えている。そのうち進路変更まで考えている者はわずか2名であり、残りは後悔はしているが、現状を「しかたがない」とあきらめ、進路変更までは考えていない学生である。

次に自分が所属する大学に対してどの程度誇りをもっているかについて検討してみる。この所属大学に対する「誇り」は、当然のことながら、そこに所属している「自分」に対する自己評価という側面も含んでいる。つまり「〇〇大学」の学生であることに誇りをもっているということは、大学に対する誇りであるのと同時にその学生である自分に対する誇り(高い自己評価)でもあるのである。「強く誇りをもっている」学生は6.6%にすぎないが、「どちらかというともっている」学生まで含めると、6割弱の学生が程度の差はあるが、自分の大学に誇りをもっている。一方、「まったく誇りをもっていない」学生も7.4%おり、「どちらかというともっていない」学生まで含めると、4割強の学生が所属大学に対して誇りを感じておらず、したがってそのような大学に所属している自分に対しても否定的な自己評価を与えていることになる。

以上、所属大学に対する適応という問題を、進路選択の結果に対する評価と大学に対する誇りという2つの観点から別々にとらえてみたが、次にこの2つの観点をクロスさせて、女子大学生の大学適応の問題をさらに深く分析してみることにしよう。

Table 1 を見ると、「入学して良かった」と評価し、かつ自分の所属大学に対して誇りを「強くもっている」学生は、29名(5.3%)である。それに対して、入学したことを現在「後悔して」いて、かつ誇りを「まったくもっていない」学生は27名(5.0%)である。前者の、自分の所属大学に対して高い適応を示している学生たちをこれから「高適応群」と呼ぶことにする。これに対して後者の、自分の大学に対して不適応状態を示してい

る学生たちを「不適応群」と呼ぶことにする。

これからの分析においては、焦点をこのまったく対照的な適応状況を示す2群の学生に絞り、2群の学生間にどのような相違がみられるかについて検討を行なうことにする。

大学・短大、学年による分析

学生の大学への適応が、学生のどのような属性と関連しているかを分析するために、まず基本的属性として、大学と短大あるいは学年によって大学への適応状況に相違がみられるかについて検討する。

Fig. 1 は、大学・短大、学年別に、高適応群、不適応群それぞれについて各群に含まれる学生の出現率を示したものである。まず大学・短大別に検討すると、高適応群の出現率は、大学が3.1%、短大が6.4%と短大のほうが高くなっており、一方不適応群は、大学が6.7%、短大が3.9%と、逆に大学のほうが出現率が高くなっている。この結果から、短大生のほうが大学への適応状況が良いことがわかる。

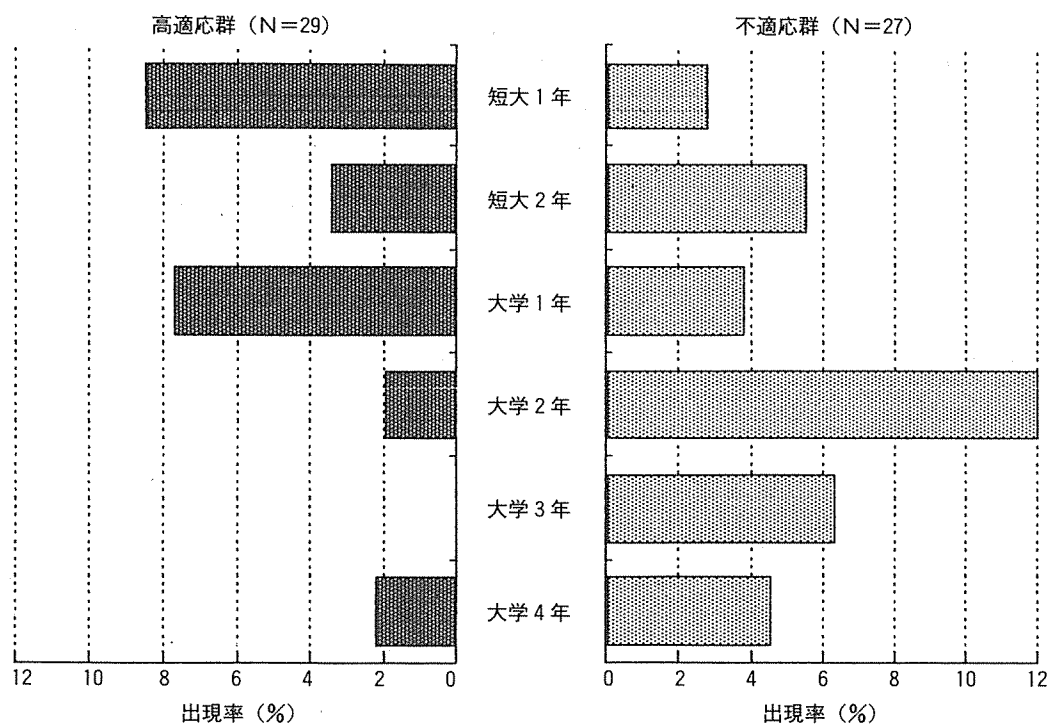


Fig. 1 Percent occurrences of students who were involved in each highly adaptive group and maladaptive group according to the enrollment of students.

次に学年別にみると、大学、短大いずれにおいても、学年が低いほうが適応状況は良く、学年進行とともに不適応群の出現率が高くなっている。特に入学後まだ1カ月前後しか経過していない1年生の高適応群の出現率が高くなっている。入学直後の1年生は、不本意入学者は別として、合格の喜びの余韻がまだ残り、新しい大学生活への期待に胸をふくらませている時期であるといえるので、高適応群の出現率が高いのはよく理解できる。ここで問題なのは、このあと学年進行とともに大学に対して高い適応を示す学生が減り、それに反して不適応状況を示す学生が増加傾向にある点である。とくに大学2年生の不適応群の出現率が12.0%と他を圧して高くなっている。この不適応学生の増加の原因を、年齢の上昇に伴う意識の変化といった学生側の要因に求めるべきか、それとも大学の教育方針・教育体制あるいは学生に対する対応といった大学側の要因に求めるべ

きかは、解明が待たれるきわめて重要な問題であると言えるだろう。いずれにせよ、学年の進行とともに不適応学生が増加する今の現状は、大学教育の効果という観点から考えて不健全な状態であり、これに対する緊急の対応が必要とされよう。

進学動機と入学動機

同じ大学で同じ教育を受けていながら、そのおかれている状況に満足して充実した学生生活を送る学生がいる反面、その状況を後悔の念にさいなまれながら、あきらめによって受け入れている学生もいる。このような差が何に起因するかを探ることが本研究の主要な目的であるが、その原因の一つとして大学への進学動機と当該大学への入学動機の問題を考えてみたい。前述したように、現在のような大衆化した大学においては、学生の大学への進学動機そのものが多様化し、大学に何を求めるかが個人によって大きく異なるようになってきている。したがって、所属大学に適応できるか否かは、その学生がどのような目的をもって大学に入学したかに大きく関わってくると考えられる。

大学へ進学しようと思った動機として主要な11の動機を選択肢としてあげ、その中から自分にあてはまるものを2つ選択させた。その結果が Fig. 2 に示されている。

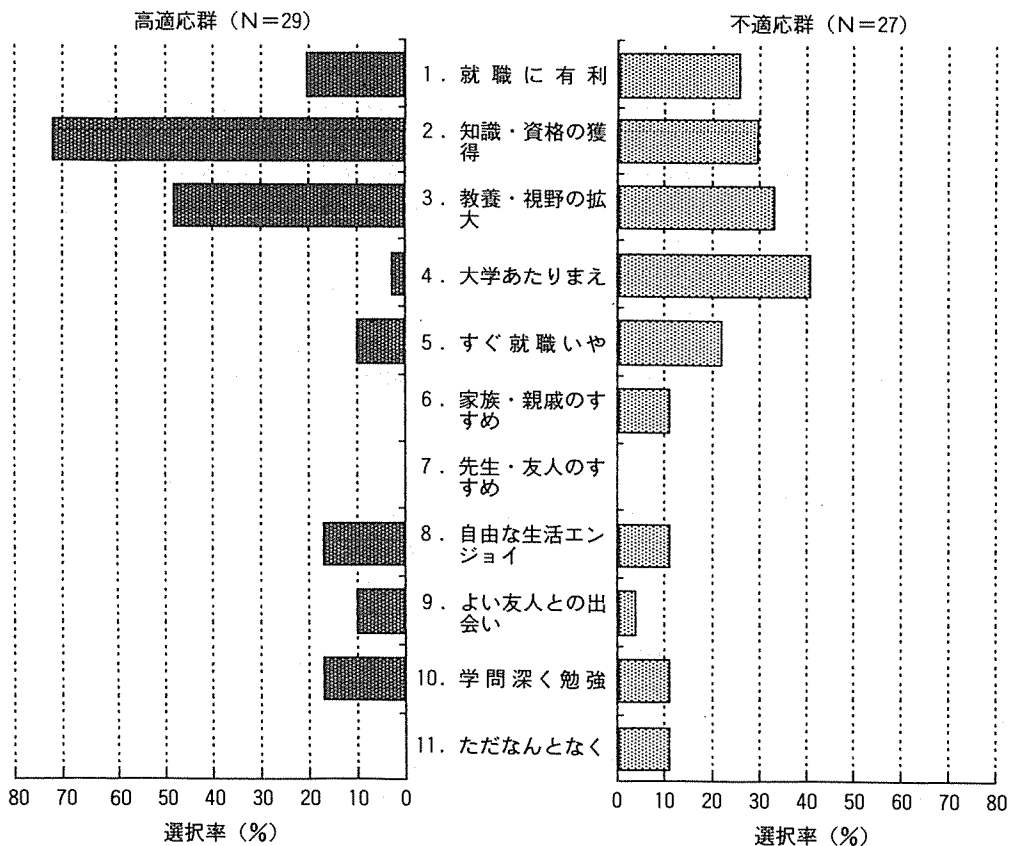


Fig. 2 Comparison of the motivation to college education between highly adaptive group and maladaptive group.

高適応群に特徴的な点として、まず第1に「将来に備えて専門的知識、技術、資格などを身につけたいと思ったから」を選択した学生が、72.4%と他の項目に比べて特に高くなっている点をあげることができる。全

被験者を対象にした場合も、この動機の選択率は42.9%で、11の動機の中のトップであるが、高適応群の場合はその選択率の高さが顕著である。高適応群の進学動機の第2位は、「自分の教養や視野を広げたいと思ったから」の48.3%である。この動機は全被験者の場合も42.2%で第2位を占めている。このように、高適応群に属する学生は、その進学動機として、「知識・技術・資格の獲得」や「教養・視野の拡大」といった大学の使命から考えて本来的な、積極的な動機をあげる傾向が顕著であることがわかる。一方、「家族・親戚の者が大学進学を強く要望したから」「先生や友人にすすめられたから」「ただなんとなく」という、いわば他律型あるいは無目的型の動機をあげるものは皆無であり、「現代では誰でも大学に行く時代だから」という無目的・消極型の動機をあげるものも3.4%（全体では18.7%）とほとんどみられない。以上の結果より、高適応群の学生は、はっきりとした積極的な目的をもって大学に進学してきているといえる。

次に不適応群の学生の進学動機についてみると、高適応群の学生とはきわめて対照的な姿が現われている。不適応群は、「現代では誰でも大学に行く時代だから」という無目的・消極型の動機が第1位となっている。第2、3位には「知識・技術・資格の取得」(33.3%)、「教養・視野の拡大」(29.6%)という積極型の動機がきているが、その選択率は、全被験者の選択率は比べると低い値になっている。また「ただなんとなく」大学に進学したと答えるものが約1割存在し、全被験者の場合の5.3%の約2倍の選択率となっている。このようにみると、不適応群の学生の進学動機はきわめて曖昧であるか、あるいは初めから目的をもたずに大学へ進んできているといえることができる。

次に入学動機について検討する。進学動機では、一般論としての大学への進学理由について尋ねていたのに対して、この入学動機では、数ある大学の中から現在所属する大学に入学することを最終的に決めた理由について尋ねている。この入学の決定は、大学進学の方法、自己の能力と適性、大学のカリキュラムの内容、雰囲気、卒業後の進路、などさまざまな要素を総合的に判断して、最終的に意志決定がなされるが、その決定によって将来の職種、履歴までも大きく規定されることになる。その意味では、この意志決定は人生における重大な決定の一つであるといっても過言ではない。

現在の大学（学科）への入学を決定した動機を、選択肢としてあげられた13の動機の中から2つ選択させた。各動機の実選択率が Fig. 3 に示されている。

高適応群の学生に最も多く選択された動機は、「自分の勉強したい分野の教育・研究体制が整っているから」(48.3%)で、約半数の学生に選ばれている。第2位は「役に立つ資格が取得できるから」(27.6%)、第3位は「大学の特色・学風にひかれて」(20.7%)、というように、高適応群の学生は、現在の大学が自分の大学進学のために適していたことを入学動機の上位にあげている。このように高適応群には、「教育・研究体制が整っている」ことを入学動機にあげる学生が最も多いが、しかしその割合が全被験者の割合(58.9%)よりも低く、また「大学の特色・学風にひかれて」という動機は選択率では第3位であるが、全被験者の選択率(7.6%)と比較するときわめて高い値となっている、ということを見ると、高適応群の学生には、大学の雰囲気、イメージといった部分にひかれて入学を決めた者が他の学生よりも多く含まれているといえることができる。

これに対して不適応群の学生の入学動機のトップは「他に行きたい大学があったが、自分の成績では本学（学科）しか入れなかったから」で、これが66.7%と高い選択率になっている。つまり不適応群の学生の3分の2が、現在の大学に不本意ながら入学したというわけである。次に高いのが「卒業後の就職状況がよいから」(29.6%)という動機である。ここで注目すべきことは、「施設・設備が整っているから」「自分の勉強したい教育・研究体制が整っているから」を理由にあげた学生は不適応群には少ないことである。つまり、就職というのは本来大学で勉強した内容・成果と深く関わりあったものであるはずであるが、不適応群の学生においては、進学する大学を決定する際に、その大学で何をどのように勉強するかという大学生活の本来的な中味の部分が最初から欠落しており、大学生活の結果として伴う「就職状況の良さ」が、大学の中味とは全く切り離された形で一人歩きしてしまっているのである。第3位は「自分の成績の水準に見合った大学（学科）だから」という動機であるが、これも現在の大学の水準を評価して、という積極的な意味あいでは解釈するよりは、現在の大学の水準は不本意ではあるが、自分の成績ではこのレベルが精一杯であったという無念さときらめけの気持ちを含んだ動機として解釈されるべきであろう。

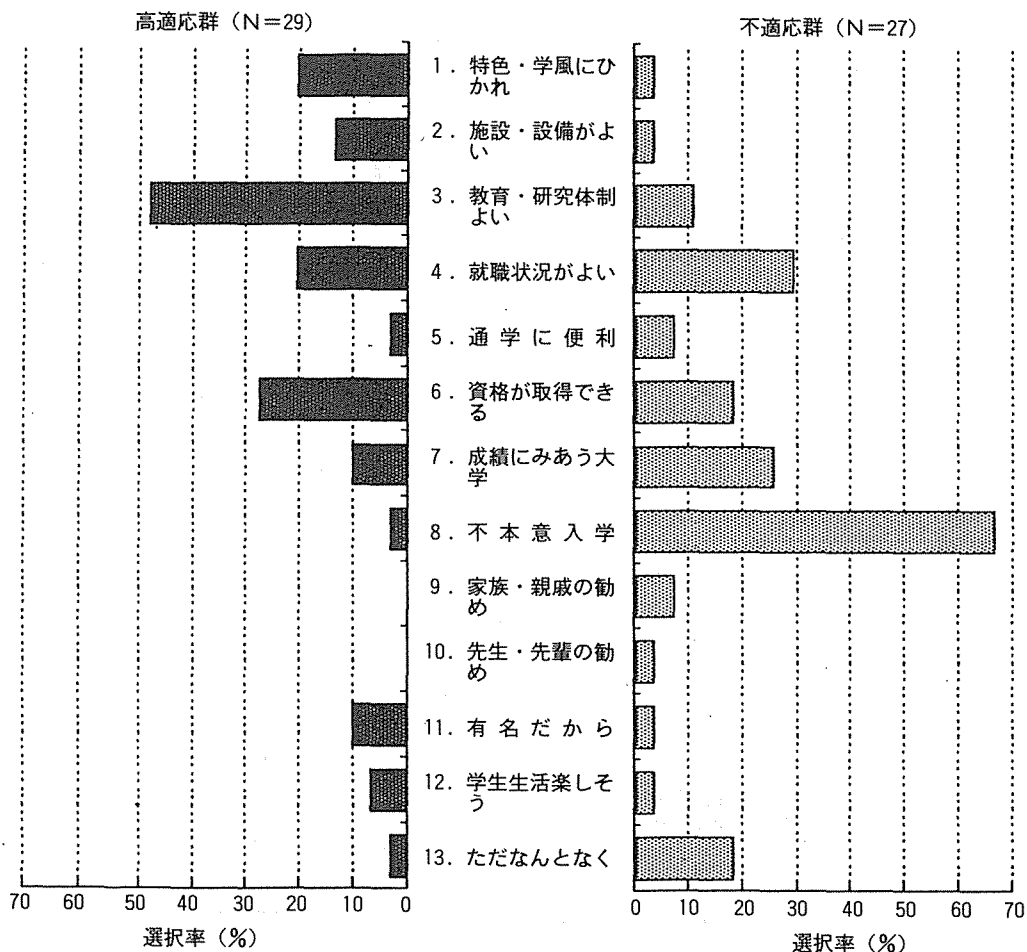


Fig. 3 Comparison of the main reasons in making a decision of which college to enter between highly adaptive group and maladaptive group.

以上の結果より、入学動機に関して不適応群の学生の典型像を描いてみると、「本当は他にもっと行きたい大学があり、他の分野の勉強がしたかったが、残念ながら自分の成績ではその希望はかなえられなかった。そのため、自分の興味・適性というよりも、卒業後の就職のことを考えて現在の大学を選んだ」ということになるだろう。

制服に対する意識・態度

研究対象としたこの大学・短大は、伝統として制服制度を堅持している。学生は規定の制服を常時着用することが求められ、この制服着用は大学の教育目的を具現化し、かつ当該大学の学生としてのアイデンティティを生み出すものとして、いわばこの大学の教育の根幹をなしている。

現在このような厳格な制服制度を有している大学は、特に4年制の大学としてはきわめて稀であり、これがこの大学の大きな特徴ともなっている。したがってこの制服制度をどのように理解し、制服着用をどのように内面化させるかが、この大学の学生としてのアイデンティティのあり方を規定する一つの大きな要因となっており、そのあり方いかんによって大学への適応状況も大きく変わってくるものと考えられる。そこで以下の分析においては、高適応群と不適応群で制服に対する意識・態度にどのような違いがみられるかについて検討する。

まず大学を選択する際に、その大学に制服制度があるか否かが重要な要因だったかどうかを尋ねてみた。全被験者を対象とした結果では、「重要だった」11.5%、「どちらかといえば重要だった」24.7%、「どちらかといえば重要ではなかった」37.3%、「重要ではなかった」26.5%となり、全体では大学選択に際しては、制服の有無は「重要ではなかった」とするものの方が多かった。この点について、大学進学者と短大進学者の間に意識の差は見られなかった ($\chi^2=2.28$, N.S.)。また、高適応群と不適応群との間にも意識に有意差はみられず ($\chi^2=0.21$, N.S.)、大学の進学先を決定する際に、その大学に制服があるか否かを重要視する程度は、両群の学生の間には差がなかった。

それでは、現在の制服に対する意識・態度はどうなっているだろうか。制服に対する意識・態度として10個の選択肢を提示して、その中から自分にあてはまるものを回答数を無制限にして選択させた。選択肢には、制服に対して好意的および非好意的な意識・態度のものがそれぞれ4個ずつ、それに中立的なものが2個含まれている。各被験者に選択された選択肢の内容に応じて、制服に対して好意的な選択肢に1点、非好意的な選択肢に-1点、中立的な選択肢に0点を与え、その合計点をもって各個人の制服に対する好意度得点とした(得点は4点から-4点の間に分布する)。

高適応群と不適応群の各群に属する学生の制服に対する好意度得点を比較すると、高適応群の平均が2.17 (SD=1.18)、不適応群が-1.81 (SD=1.63)となり、高適応群の学生のほうが制服に対して有意に好意的な意識・態度を示している ($t=10.33$, $p<0.01$)。

続いて各選択肢の選択率の結果 (Fig. 4) を検討することにより、両群の制服に対する意識・態度の相違をさらに詳しく分析することにする。制服に対する好意度得点の比較において、高適応群と不適応群で明確な差があったという先の結果からも予想できるように、各選択肢の選択率は両群の間できわめて対照的な結果を示している。当然のことながら、高適応群は制服に対して好意的な内容をもつ選択肢 (1, 4, 9, 10) に高い選

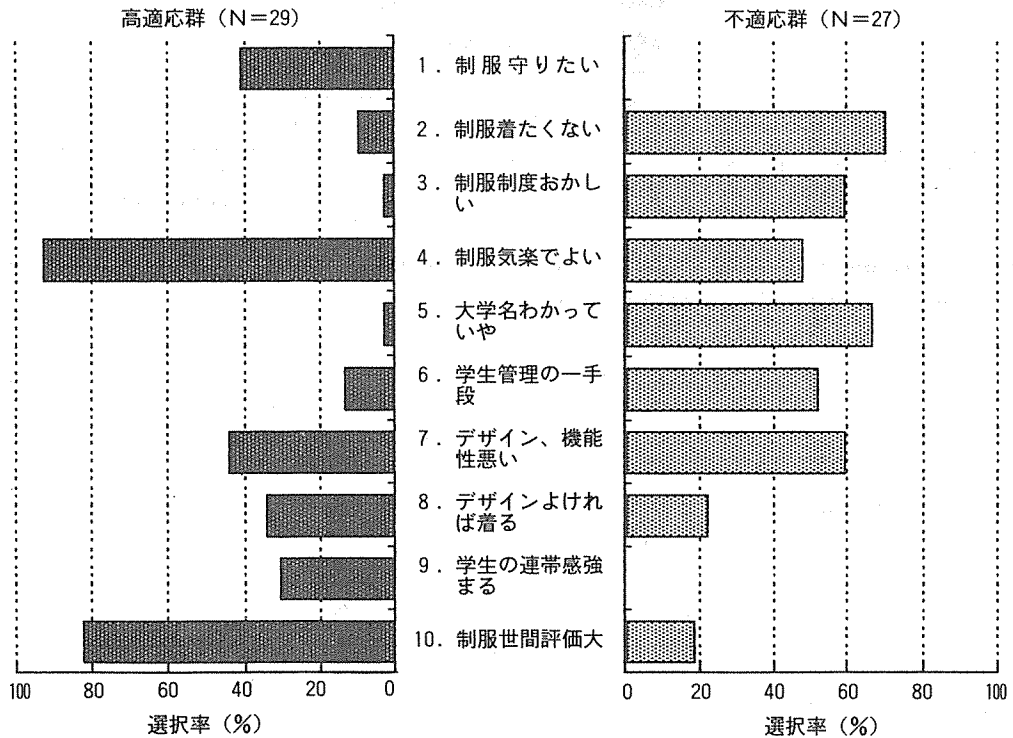


Fig. 4 Comparison of attitude toward the school uniform between highly adaptive group and maladaptive group.

択率を示し、一方不適応群は、非好意的な選択肢（2, 3, 5, 6）に高い選択率を示している。中立的内容の選択肢では、「現在の制服は、デザインや機能的がよくない」とする学生は、高適応群44.8%、不適応群59.3%となっており、両群とも約半数の学生は現在の制服に物理的な問題点を感じている。また「制服が、たとえば有名デザイナーがデザインしたようなセンスの良いものになれば、それを喜んで着るだろう」という意見に対しては、高適応群は34.5%が賛成を示し、不適応群でも22.2%が同意している。この結果は逆の見方をすれば、いくらセンスのよい制服であっても「学生全員が同じ服装をして、自分の好みで服装を選べない」という制服制度そのものを積極的に受け入れることのできない学生が、高適応群においても6割以上いることを示している。

高適応群において最も選択率の高いのは、「制服があると服装にお金をかけたり、気をつかったりする必要がないので、制服はあった方がよい」という意見で、93.1%の学生が同意を示している。ついで第2位は、「本学は制服制度があることで、世間や企業などから好意的な評価を得ていると思う」の82.8%であった。この2つの意見が10個の選択肢の中で特に高い選択率を示しているが、どちらも大学教育における制服の意義を積極的に評価した意見でない点に注目する必要がある。制服に対する積極的な意見としては「制服があることを知った上で入学したのだから、決められた制服をしっかりと守りたい」とするものが41.4%いる。この態度に同意した学生は、不適応群では皆無、全体でも13.2%に過ぎないことを考えれば、高適応群の「制服を守りたい」とする意識は、学生全体と比較するときわめて高いといえる。しかしこれも、逆にみれば、高適応群の学生であっても全体の6割の学生は、「制服をしっかりと守りたい」という意志を自分のものとして内面化できていないことを意味するものといえる。「制服を着ていると学生同士の連帯感が強まる」という学生間の連帯における制服の役割を積極的に評価する意見に対しては、高適応群の学生の31.0%が同意を示し、これも選択率が不適応群では0%、全体でも7.3%であることを考えると、高適応群の学生の制服に対する評価は、平均的な女子大学生と比較してきわめて高いことができる。

次に不適応群の学生の制服に対する意識・態度の特徴について検討する。まず特徴的なのが、上でも指摘したように、「制服をしっかりと守りたい」「制服によって学生の連帯感が強まる」という2つの意見・態度に同意したものが皆無で、制服に対して積極的な評価を下している学生がまったくみられないことである。

不適応群において最も選択率が高いのが「制服があることを知った上で入学したことは確かだが、やはり制服は着たくない」（70.4%）という制服に対する拒否的の反応であるが、ここで大切なのはなぜ制服を着たくないのかというその理由である。その理由を他の選択肢に対する反応から探ってみることにしよう。不適応群の学生に2番目に支持されたのは「制服を着ていると、知らない人にも自分の大学名がわかってしまうのでいやだ」という意見（66.7%）である。これは制服そのものがいやだというよりも、所属している大学そのものを受け入れることができず、そのためにその大学のいわばシンボルともいえる制服に対して反発を示していると解釈できよう。これは不適応群の学生が、入学を後悔している学生であり、大学に対して誇りをまったく感じていない学生であることを考えれば、当然の結果といえる。

「大学にもなって制服制度があること自体がおかしい」とする「制服」という制度そのものに対する反発は、選択率では第3位であるが（59.3%）、高適応群（3.4%）、全体（30.5%）と比べてきわめて高い値となっており、不適応群の学生の特徴として指摘することができる。また「制服は大学側が学生を管理する手段となっている」と考える学生も不適応群の半数に及んでいる。以上のことから、不適応群の学生は制服のもつ物理的、ファッション的特性に反発していると考えたよりは、制服によってシンボライズされている大学、あるいは制服を制度として強制しようとする大学の教育方針といった、制服の背景的要因に拒否反応を示している、と理解したほうがより真実に近いといえるであろう。つまり彼女たちにとって制服は忌避すべき大学のシンボルとして映っているのだろう。このことは以下の事実からも推測できる。

「制服を着たくない」とする学生が不適応群の学生の7割を占めていることは先に述べたが、一方「制服があると服装にお金をかけたり、気をつかったりする必要がないので、制服はあった方がよい」とする学生も不適応群には約半数いるのである。さらに不適応群の学生の22.2%が、この2つを同時に選択しているのである。これらの学生は、表面的には矛盾した回答を示していることになるが、この矛盾の中にこそ彼女らの制服に対する複雑な意識を読みとるべきであろう。すなわち、彼女らは自分が属する大学に制服がないと、学生の

間の競争意識から服装がどんどん華美になり、そのような雰囲気には自分をはじめそうにないが、かといって自分だけがそのような雰囲気から超然としていられる自信はなく、必然的に服装をめぐる「心理戦争」に巻き込まれそうな気がする。そこで、制服があればそのような気づかいは必要でなくなるので制服はあった方が気が楽でよいと考える。しかし同時に、好きで入ったわけでもなく、したがってその雰囲気や教育方針になじむことができず愛着も感じられない現在の大学を、その大学のシンボルである制服を着ることによって受け入れ、内面化することに対して感じる心のわだかまりをどうしても捨て去ることはできない。この2つのアンビバレントな感情が、上述した制服に対する矛盾した意識・態度となって現われているものと考えすることはできないであろうか。

適応を規定する要因

今までの分析では、自分の所属する大学に高い適応を示す学生と、不適応を示す学生の間どのような相違がみられるかについて、大学・短大、学年、進学動機、入学動機、制服に対する意識・態度、の観点から検討を行ない、いずれの点についても高適応群と不適応群の学生間ではっきりとした差異がみられることが明らかになった。そこで以下の分析では、学生間に大学への適応の差を生みだしている要因の構造を解明するために、高適応群と不適応群を外的基準にとり、大学への適応に寄与すると思われる5要因(総カテゴリー数15)を説明変数として、数量化Ⅱ類による検討を試みる。

分析結果は Table 2 に示されている。判別の精度を示す相関比は $\eta^2=0.926$ 、判別成功率は98.2%となっており、判別の精度はきわめて高い(判別に失敗したのは56名中1名のみ)。サンプルスコアの平均値は、高適応群が0.413、不適応群が-0.444であった。また判別に寄与する要因の程度は偏相関係数とレンジの値でもって示し、順位は偏相関係数の高さによって決定した。

大学への適応状況を規定する第1の要因は制服に対する好意度の要因である。好意度は、前に用いた好意度得点によって、高好意度(2点以上)、中好意度(-1点以上1点以下)、低好意度(-2点以下)の3つのカテゴリーに分類した。カテゴリースコアをみると、制服に対する高好意度は所属大学への適応を良くする方向に作用している。これに対して中好意度、低好意度はいずれも適応を低める方向に作用していることがわか

Table 2 An analysis by Hayashi's quantification theory II according to factors contributing to the discrimination between highly adaptive group and maladaptive group.

アイテム	カテゴリー	N	カテゴリー スコア	偏相関係数 (レンジ)	順位
大学/短大	1. 大学	19	0.0585	0.1850 (0.0885)	第5位
	2. 短大	37	-0.0300		
学年	1. 1年	30	0.1155	0.5817 (0.6452)	第3位
	2. 2年	20	-0.0441		
	3. 3年	3	-0.5297		
	4. 4年	3	-0.3311		
出身高校	1. 系列高校	14	-0.1010	0.3795 (0.1983)	第4位
	2. 公立高校	37	0.0573		
	3. 私立高校、その他	5	-0.1410		
志望順位	1. 第1志望	35	0.1249	0.6559 (0.6533)	第2位
	2. 第2志望	4	0.3207		
	3. 第3志望以下	17	-0.3326		
制服に対する 好意度	1. 高 ($2 \leq X \leq 4$)	23	0.3016	0.6950 (0.5988)	第1位
	2. 中 ($-1 \leq X \leq 1$)	17	-0.1274		
	3. 低 ($-4 \leq X \leq -2$)	16	-0.2982		

る。適応を規定する第2要因は、現在所属している大学(学科)の志望順位で、第1志望、第2志望は適応を高める方向に作用し、第3志望以下は適応を悪くする要因となっている。この2つの要因は、0.1%水準で外的基準に対する有意な説明変数となっている。

適応の良否を規定する第3の要因は、学年である。カテゴリースコアをみると、1年だけが適応を良くする方向に作用し、2年以下は適応を悪くする方向に作用している。この学年の要因は1%水準で外的基準の有意な説明変数となっている。

第4要因の出身高校の種別、第5要因の大学・短大の種別は、大学への適応を規定する要因としては有意な説明変数とはなっていない。

以上の分析より、制服に対する好意度、志望順位、学年の3要因が大学への適応と深く関わっていることが明らかになった。

人格特性の分析

最後に、高適応群と不適応群で学生の人格特性にどのような相違がみられるかについて検討する。ただしここで示される結果は、学生の適応状況と人格特性との間の関連性について指示するものにとどまり、両者間の因果関係までも示唆する結果ではない。したがって、ある学生が大学に対して不適応状態に陥った結果としてある人格特性を示すようになったと解釈できるケースもあれば、ある人格特性を持つ学生が当該大学に対して適応しやすい、あるいは適応しにくいと解釈されるケースもある。

今回行った調査には、被験者の人格特性のさまざまな側面を測定する10の尺度が含まれており、合計24の下位尺度に関して得点が得られた。その結果、24の下位尺度のうち18の下位尺度において、両群の間に有意差が認められた(Table 3)。この結果に基づいて、高適応群と不適応群の人格特性の相違に関してまとめると、以下のようなになるだろう。

高適応群の学生は不適応群の学生と比較して、社会的自己意識特性に関しては、対人状況に意識、注意を向ける程度が高く(公的自意識、自己モニタリング)、自己のユニークさを主張するというよりは(独自性欲求)、他者にあわせて自分をコントロールしようとする傾向が強い(自己モニタリング)。そのような対人戦略の結果として対人関係には自信をもっているといえる(社会不安、社会的スキル)。また努力すればそれが結果となって現われるという内的制御型の信念をもっており(Locus of control)、それが対人関係においても、人間はお互いに理解・共感が可能であるという考え方(LSO-U)に現われている。全体として自分に対して不安はあまり抱いておらず(アイデンティティー不安傾向、心気症傾向)、自信をもっており(自尊心、女性的性役割に対する不適応感)、他の人間に対しても社会に対しても信頼感が強い(対人不信傾向、社会不信傾向)。無力感は不適応群に比べて著しく低い。

価値観としては、高適応群の学生は積極性、伝統志向性が高いが、自己充足性は低くなっている。

以上の結果を総合すると、高適応群の学生は、努力すればそれが結果として現われるという内的制御型の信念と自己、他者、社会に対する強い信頼を背景として、自己を主張するというよりは、他者に自分をあわせるという他者志向的な戦略を基本として他者・社会に臨み、それが結果として、自分は対人関係、社会生活においてうまくいっているという高い自己評価につながっているものと解釈できる。

これに対して不適応群の学生は、「自分の考え、価値観を大切にしたい」「ユニークでありたい」「自分に忠実に生きたい」といった内部志向的な戦略を基本として生きていこうとしているが、それが結果において対人関係や社会生活においてさまざまな軋轢を生みだし、そのことが彼女らの自尊心を低め、無力感を高め、自己に対する不安や他者・社会に対する不信傾向につながっているものと考えられる。

ま と め

従来大学不適応の問題は、留年を繰り返す学生、学校に出てこない(出てこられない)学生、自殺といった、いわば社会病理的な現象として顕在化し、それらはたとえば、スチューデント・アパシーや自我同一性の拡散といった問題を抱えたある特定の個人の問題として扱われることが多かったといえる。もちろん、そのような個人の資質という視点から大学不適応の問題に取り組むことも大切なことではあるが、今回の分析では、学生の大学不適応は、日本の大学がおかれている社会環境や各大学独自の教育理念、教育体制、雰囲気などと

Table 3 Comparison of personality characteristics between highly adaptive group and maladaptive group.

尺度名	高適応群	不適応群	t 値	有意差	備考 (出典)
独自性欲求	88.9	98.3	2.656	*	岡本, 1985 ¹
私的自意識	38.5	35.5	1.792		Buss, A. H., 1980 ²
公的自意識	28.1	25.5	2.467	*	
社会不安	17.3	19.8	2.136	*	
自己モニタリング	82.5	74.4	2.387	*	岩淵・田中・中里, 1982 ³
社会的スキル	61.4	50.9	3.926	***	菊池, 1988 ⁴
孤独感 (LSO-U)	11.9	7.9	2.000	*	落合, 1983 ⁵
孤独感 (LSO-E)	1.7	2.5	0.569		
Locus of control	53.2	47.4	2.937	**	鎌原・樋口・清水, 1982 ⁶
自尊心	25.6	20.6	2.902	**	Rosenberg, M., 1965 ⁷
無力感	15.0	20.6	5.795	***	総理府青少年対策本部編, 1981 ⁸
積極性	10.8	8.9	2.660	*	総務庁青少年対策本部編, 1986 ⁹
自己充足性	7.9	8.9	1.986	*	
伝統志向性	8.7	6.7	3.661	***	
社会的内向性	3.6	5.3	1.944		神戸女学院大学学生相談室, 1986 ¹⁰
抑うつ性傾向	6.3	8.1	2.186	*	
神経症傾向	4.7	5.4	0.936		
分裂性傾向	7.1	6.5	0.919		
軽そう性傾向	7.5	6.6	1.693		
心気症傾向	2.0	4.6	3.817	***	
対人不信傾向	3.9	5.1	2.443	*	
社会不信傾向	6.1	7.9	2.644	*	
アイデンティティー不安傾向	4.7	7.3	3.741	***	
女性的性役割に対する不適応感	4.0	6.0	2.917	**	

***: p < 0.001

**: p < 0.01

*: p < 0.05

いった教育環境に対する学生の認知と密接に関連しているという視点にたつて、不適応の構造的要因を明らかにしようとした。

今回の調査で明らかになった問題点をここで整理しておくとして、まず第1に不適応学生が全体の5%を占めていたという結果は、この数字が高いか低いかはひとまずおくとして、大学不適応の問題が、その原因を単に個人的な資質にだけ帰してすむ問題ではないことを示唆している。

第2に、大学への不本意入学が不適応と密接に関連していることが明らかになったが、ここで問題なのは不適応学生の数が学年進行とともに多くなっていく点である。つまり不本意入学が大学入学当初の不適応感だけにとどまらず、それがいわば「精神的外傷」となって在学中の大学不適応の原因であり続けていると推測されるのである。このことは、大学教育の本来的部分には不本意入学者の「精神的外傷」を癒す力がないことを意味しているのかもしれない。現在の日本の教育をめぐる社会環境や大学入試制度がこのまま変わらないとすれば、不本意なまま大学に入学する学生は今後もなくなるであろう。そうであるとすれば、不本意入学者を

本意在学者に変える力のないこの大学の現状は、検討が必要であるといえよう。また学年が上がるにつれて不適応学生が増加するという結果は、大学の教育環境が新たな不適応学生を生み出している可能性を示唆しているとも考えられ、この点についても、その原因の所在の究明とその対策が求められる時期にきているといえよう。

第3の問題点は、表現者としての自己を大切にしたいという内部志向的な人格特性をもつ学生が、不適応学生に多く、逆に、他者志向的な人格特性をもつ学生がこの大学に高度の適応を示している点である。この他者志向性は、リースマンが指摘したところの大衆社会に生きる人間の社会的性格であるが、その意味では、他者志向性を対人関係における基本戦略とする学生は、現代大衆社会にも日本の文化的風土にも大学の教育環境にもよく適応した、社会的成熟度の高い人間であるといえるのかもしれない。しかし視点を変えれば、自己を大切に生きていきたいというのは人間の基本的な欲求であり、その欲求に忠実に生きようとすればさまざまな軋轢が生じ、その結果自己実現が困難になってしまう社会や大学の側に問題があるともいえよう。

いずれにせよ、大学不適応者の意識の分析を通して、学生のニーズとそれへの対応を今一度再検討することは、今後「冬の時代」を迎える大学の活性化にとって決して無駄なことではなからう。

要 旨

551名の女子大学生を対象にして行ったアンケート調査をもとにして、大学教育への動機づけ、人格特性と、大学への適応状況との関連性について検討を行った。被験者の中から、現在の大学に入学したことに満足し、かつ当該大学の学生であることに誇りを持っている高適応群（29名）と、入学したことを後悔しており、かつ誇りを持っていない不適応群（27名）を抽出し、両群の学生の大学教育への動機づけ、人格特性などを比較検討することにより、大学への適応状況に差を生じさせる要因の分析を行った。その結果、制服に対する好意度、当該大学の志望順位、学年の3要因が大学への適応と深く関連していることが明らかになった。また、人格特性に関しては、対人関係や社会生活において他者志向的な戦略を採用している学生が高適応群に多く、一方、内部志向的な戦略をとる学生が不適応群に多いことが明らかになった。

引用文献

1. 岡本浩一 独自性欲求の個人差に関する基礎的研究 心理学研究, 56 (3), 160-166, (1985)
2. Buss, A. H. Self-consciousness and social anxiety. W. H. Freeman, (1980)
3. 岩淵千明・田中国夫・中里浩明 セルフ・モニタリング尺度に関する研究 心理学研究, 53 (1), 54-57, (1982)
4. 菊池章夫 思いやりを科学する 川島書店, (1988)
5. 落合良行 孤独感の類型判別尺度 (LSO) の作成 教育心理学研究, 31 (4), 60-64, (1983)
6. 鎌原雅彦・樋口一辰・清水直治 Locus of Control 尺度の作成と信頼性, 妥当性の検討 教育心理学研究, 30 (4), 302-307, (1982)
7. Rosenberg, M. Society and adolescent self image. Princeton University Press, Princeton, N. J., (1965)
8. 総務庁青少年対策本部編 現代青少年の生活と価値観—「現代青年の生活志向に関する研究調査」報告書 大蔵省印刷局, (1986)
9. 総理府青少年対策本部編 いまの青年・いまの大人—青少年の社会性と個性に関する調査報告書 大蔵省印刷局, (1981)
10. 神戸女学院大学学生相談室 1985年度学生生活実態調査報告書 神戸女学院大学, (1986)

(1989年9月21日受理)